

刊行にあたって

長らく保険診療における修復物は、鑄造歯冠修復が中心となってきた。しかし、2014年に CAD/CAM 冠が保険収載になってから、国の方針や歯科医師および患者の意識に少しずつだが変化が現れていると思われる。

金属は金属アレルギー、細菌付着性やアレルギーなどの生体親和性の部分で問題視されてきた。加えて、金属価格の市場変動が大きく、時勢に合わせた保険点数の改定は困難な状況である。近年、貴金属やパラジウムなどの価格が高騰したことが、歯科界に大きな変化をもたらした原因の 1 つであると考えられる。

2024年 6 月からは、単冠の鑄造歯冠修復から補綴維持管理料が廃止され、金属に頼らない修復物が主流になる方向性は確実であるとみられる。

2014年に最初に収載された CAD/CAM 冠においては、導入後の予後について、いくつかの研究報告によれば、当初の予想よりもよい結果を出しており、脱離や破折などの合併症の発生率が低く、審美的・機能的な患者満足度も高いことが報告されている。保険診療でもメタルフリーを目指す大きなソリューションの 1 つとなったことはいうまでもない。

2022年に収載された CAD/CAM インレーは、ダイレクトコンポジットレジンの欠点である隣接面コンタクトの回復の困難性と、不完全な重合による残留モノマーの問題を解決できる。また、接着性修復による二次う蝕の低減や、従来のインダイレクトのコンポジットレジニンレーの保険点数の低さも改善され、多くの点で評価される。

2024年 6 月からは口腔内光学印象装置（IOS）による印象加算も収載された。適合精度の向上と通常印象の不快感をなくし、印象材と石膏模型の無駄を排することもできて、時代のトレンドに合った保険収載であると考えられる。

PEEK 材が2023年12月より突然ともいうべきタイミングで保険収載になり、すべての大臼歯に適用になったことには驚きを隠せなかったが、従前までは医科から金属アレルギーの診断書をもらわなければ、メタル修復の選択肢しかなかった第 2 大臼歯と第 3 大臼歯にメタルフリーの選択肢ができたことを勘案すれば、保険収載は英断であったと関係各位に敬意を評したい。

ただし、CAD/CAM 冠・インレーや PEEK 冠は、いままで学校教育で取り入れられていなかったことから、理工学的な知識や金属修復とはまったく異なる形成や接着の理論と手技について、必ずしも保険医全般に周知徹底されているとはいえない。そのため、早急に臨床応用上の留意点を示す必要性を感じる。

本書では、CAD/CAM 冠の保険収載にあたり、デジタル歯科黎明期より、デジタルによる加工方法やマテリアルの開発、臨床試験などに大きく貢献されてきた正田一洋教授（北海道医療大学歯学部）に、保険診療分野でのデジタル技術の応用におけるこれまでの経緯や理工学的な知見、算定方法などについて、専門的な見地でご執筆いただいた。加えて、臨床部分の記載への監修をお願いすることができた。

本書が先生方のデジタルの保険診療への一助になれば幸甚である。

2025年 1 月
草間幸夫